を「中米」とした)。それによると、アジアが圧倒的に多く、1979～1987年は80%以上、1988年からは約90%を占めている。ついで南米であるが、1980年代前半までは約10%を占めてきたが、1980年代後半は４%台、1990年代になると３%台に減っている。国・地域別では、1979年は台湾、大韓民国（韓国)、タイとインドネシア（同数）の順であった。その後、1980～1984年は台湾、中華人民共和国（中国)、タイの順、1985～1986年は台湾、中国、韓国の順、1987～1989年は中国、台湾、韓国の順、1990～1994年は中国、韓国、台湾の順であった。最近の1995～1997年は中国、韓国、マレーシアの順であった。とくに中国は1990年代になると全体の外国人留学生の約半数を占めるようになった。

第２節　1980～1990年代の学生生活

本節では、1980～1990年代の学生生活をモノや情報といった物質的側面からみていきたい。

第１項　千葉大生の出身家庭

図１－５－７ａ　父親の職業（単位：%）

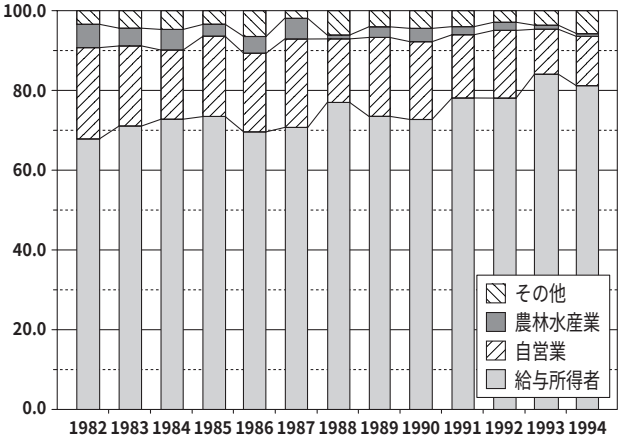


図１－５－７ａは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、父親の職業である。父親の職業を、給与所得者（企業勤務・公務員・団体職員)、自営業者（中小企業経営・自営業・自由業)、農林水産業、ほか（その他・無職・就労なし）に分けると、給与所得者は増加し、自営業者は減少している。給与所得者は、68.2%（1982年）だったのが、69.8%（1986年)、72.8%（1990年)、82.3%（1994年）と増加している。これに対して、自営業者は、

22.7%、20.0%、19.6%、12.2%と、農林水産業にいたっては、6.0%、4.3%、3.3%、0.9%と減少している。

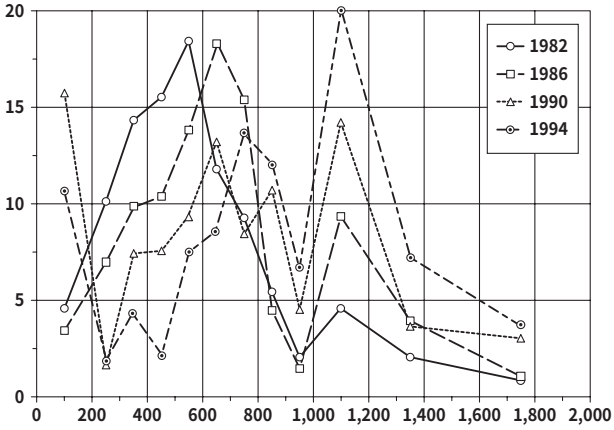
給与所得者を大企業勤務・中小企業勤務・公務員に分けると、大企業勤務は20.8～29.2%、中小企業勤務は22.0%～33.4%、公務員は15.0～21.2%で推移している（1982～1994年）。また管理職と非管理職に分けると、管理職は42.0～50.7%、非管理職は28.3～30.3%で、管理職の方が多い（1990～1994年）。

母親の職業については、フルタイムの職業を持っている者が33.6～43.5%、パートタイムが28.3～38.0%、就労なし（専業主婦）が24.6～32.3%であった（1990～1994年）。

千葉大生の親の年収の中央値は、全国の世帯別所得金額の中央値はもちろん、全国の国立大生の親の年収をも上まわっている。

図１－５－７ｂは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、家計支持者の年収である。これをもとに、年収の中央値を比べると、573万円（1982年）だったのが、665万円（1986年）、729万円（1990年）と増加し、892万円（1994年）になっている。これは全国の国立大学生（４年制昼間部）の家計支持者年収の中央値である535万円（1982年）、574万円（1986年）、687万円（1990年）、803万円（1994年）を上まわっている。もちろん厚生省の「国民生活基礎調査」による全国の世帯別所得金額である500万円（1990年）と545万円（1994年）をも上まわっている。

図１－５－７ｂ　家計支持者の年収（単位：%　2,000万円以上は省略）

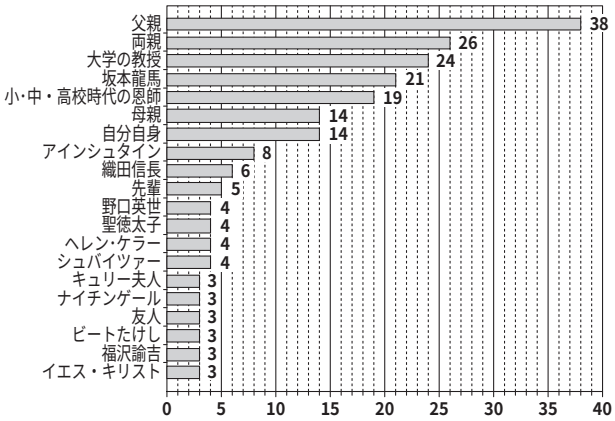


1980年代では500～600万円台がもっとも多かった。しかし、1990年代に入ると、1,000～1,200万円台が最も多くなり、同時に200万円未満も増えている。年収500～600万円台は、18.4%（1982年）、13.8%（1986年）、9.3%（1990年）、8.0%（1994年）と推移する。これに対して、年収1,000～1,200万円台は、4.6%、9.3%、14.2%、20.0%と推移し、200万円未満も、4.6%、3.4%、15.7%、10.7%と推移す

る。

ところで、1985年の『千葉大生白書』は、千葉大生が尊敬する人物を調査している。その結果が図１－５－８である。これによると、興味深いことに、尊敬する人物の上位に両親が位置している。１位が父親（38人）、２位が両親（26人）、さらに６位が母親（14人）である。それに学校の教師が続く。３位が大学の教授（24人）、５位が小・中・高の恩師（19人）である。いわゆる歴史上の人物は上位グループに入ってこない。坂本龍馬が４位（21人）で最も高く、アインシュタイン８位（８人）、織田信長９位（６人）と続く。身近な人物が尊敬の対象になっている。

図１－５－８　尊敬する人物（単位：人）



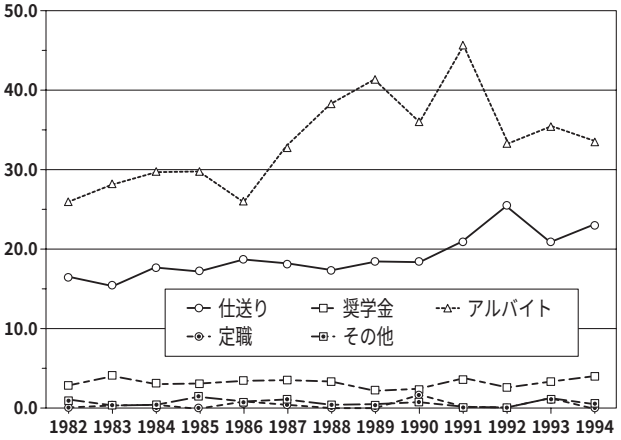
第２項　収入と支出

⑴　収　　入

図１－５－９ａは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、1982～1994年の自宅生の収入（月額の平均）である。内容は、仕送り（家庭からの仕送り、自宅生は小遣い）、奨学金、アルバイト、定職（正規職員またはそれに準ずる身分）、その他（貯金引出し等）に分類されている。

総額は、1982年には46,300円から増加して、1991年には70,300円になった。しかし、その後は減少し、1994年には61,000円となった。収入

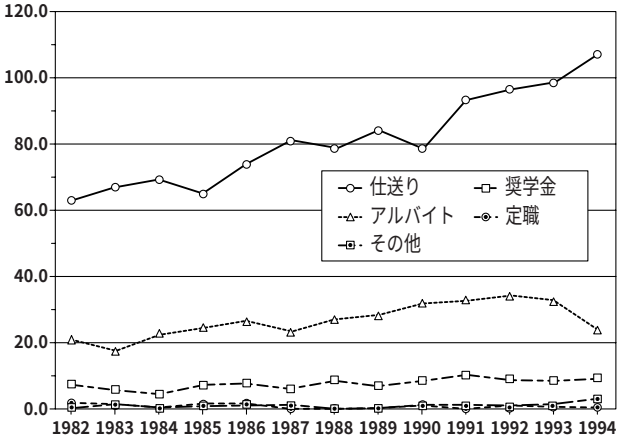
図１－５－９ａ　自宅生の収入（月額　単位：千円）



の中心は、アルバイトであり、ついで親からの小遣い、奨学金の順である。アルバイトでの収入は1982年には26,000円であった。1980年代前半は漸増したが、1980年代後半に急増し、1991年には45,700円にはねあがった。しかしその後は減少し、1994年には33,500円であった。これに対して、親からの小遣いは、1982～1990年は１万円未満で推移してきたが、1991年からは２万円をこえて推移した。奨学金は、すべての学生が支給されているわけではないので、平均すると2,300～4,100円になってしまう。

図１－５－９ｂは、同じ資料による、同時期の自宅外生の収入（同上）である。総額は、1982年には93,800円から、1986年に10万円をこえ（111,300円）、1994年にはちょうど５万円増の143,800円になった。収入の中心は親からの仕送りであり、ついでアルバイト、奨学金の順である。仕送りは、1982年では63,000円であったが、増加をつづけ、とくに1990年代にはいると急増し、1994年には10万円をこえて107,100円となった。アルバイトの収入は、1982年では20,900円であったが、漸増して1992年に34,100円に達した。しかしその後は減少し、1994年には23,800円となった。奨学金は、自宅生と同じ理由から、平均すると4,600～10,200円になってしまう。

図１－５－９ｂ　自宅外生の収入（月額　単位：千円）

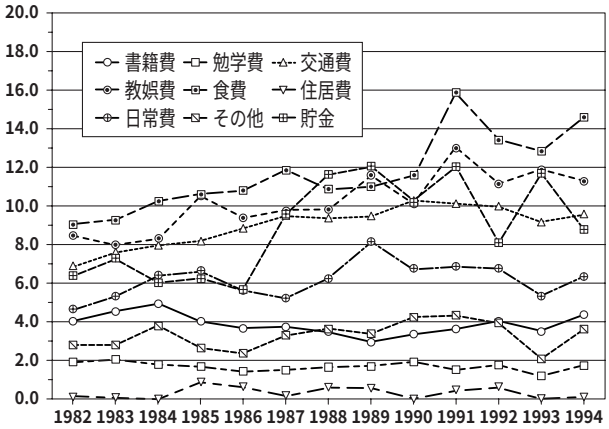


アルバイト収入は、自宅生の方が自宅外生よりも多いものの、似たような推移をしてきた。1980年代後半に急増し、1990年代に減少した。これは「バブル経済」と「バブル崩壊」の影響であろう。これに対して、自宅外生の仕送りは、一貫して増加しつづけてきた。これは、後述するが、住居費の増加が仕送りを押し上げたのである。一方、自宅生の小遣いは1980年代はほとんど変化しなかった。しかし、やはり1990年代になって、アルバイト収入が減少したので、小遣いが増えたのであろう。いずれにしても親の負担はたいへんなものである。

⑵　支　　出

図１－５－10ａは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、1982～1994年の自宅生の支出（月額の平均）である。内容は、書籍費（書籍購入費、雑誌・コミックも含む）、勉学費（筆記用具・文具・製図用品代など）、交通費（定期代１ヵ月＋日常交通費など）、教娯費（教養娯楽費、新聞代・サークル費・交際費・コンパ代・レジャー費など）、食費（自宅生は外食費など）、住居費（部屋代・ガス・水道・電気代など）、日常費（衣料品・化粧品・タバコ・フロ代など）、その他（上記に区分できないもの、電話代・クレジットなど）、貯金（貯金あるいは繰越金）に分類されている。

図１－５－10ａ　自宅生の支出（月額　単位：千円）



総額は、1982年の44,300円から増加し、1991年に68,000円に達した。その後は減少し、1994年は60,400円であった。支出の内容は、食費が１位で、教娯費、交通費がつづく。貯金は、４番目であったが、1980年代の後半に急増して１位になった。しかし1990年代に入ると、停滞してもとの順位に戻った。これに対して書籍代や勉学費は低い。

図１－５－10ｂ　自宅外生の支出（月額　単位：千円）

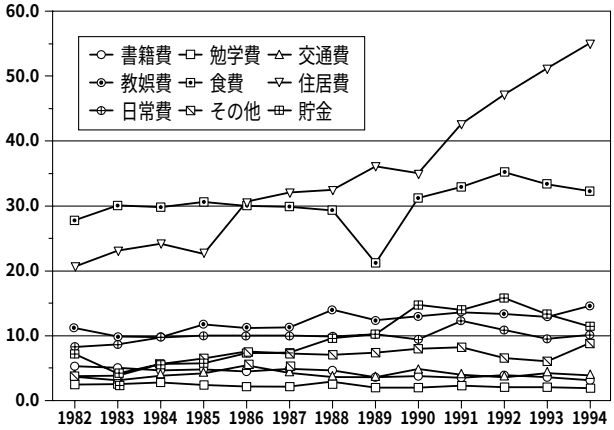


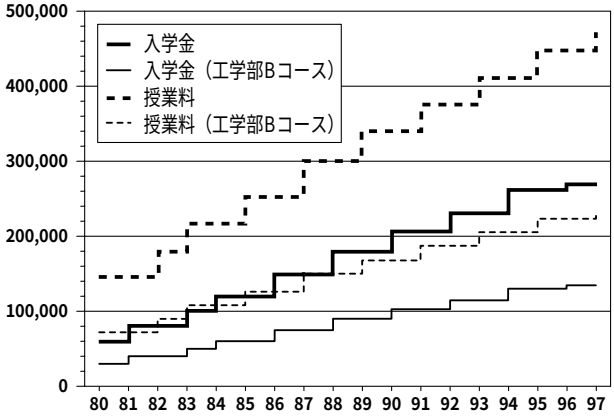
図１－５－10ｂは、同じ資料による1982～1994年の自宅外生の支出（同上）である。総額は、

1982年の90,800円から増加し、1986年に10万円をこえて108,700円となった。その後も増加しつづけ、1994年は141,200円であった。支出のなかでも、とくに食費と住居費が突出している。食費は、1989年を除いて、ほぼ３万円前後を推移してきた。一方、住居費は、1982年の20,700円から、1986年に３万円台になり、1991年には４万円台、1993年には５万円台になり、1994年は54,900円であった。これに教娯費がつづく。貯金は、1980年代の後半に増加し、1990年代なると教娯費とならんだ。書籍代や勉学費は、自宅生と同じく、低い。

⑶　授業料と入学金

ところで、この支出には授業料と入学金は含まれていない。図１－５-11は、その年度に入学した学生の授業料（１年分）と入学金である。授業料は1980年には144,000円であったが、ほぼ２年ごとに上昇して、1997年には469,200円と、3.26倍になっている。入学金は1980年には60,000円であったが、やはり２年ごとに上昇して、1997年には270,000円と、4.5倍になっている。工学部Ｂコースの授業料と入学金は、他の半額である。

図１－５-11　入学金と授業料（１年間）**の変遷**（単位：円）



⑷　アルバイト

図１－５-12ａは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、もっとも長くした（している）アルバイトと、もっとも印象に残ったアルバイトである。これによると、もっとも長くした（している）アルバイトは、塾・家庭教師（69.6%）で、水商売・接客業（12.1%）、肉体労働（7.9%）の順であった。肉体労働（男性11.9%と女性3.9%）を除いて、男女の差はほとんどみられない。これに対して、最も印象に残ったアルバイトは、肉体労働（28.4%）で、塾・家庭教師（24.0%）、水商売・接客業（20.6%）の順であった。とくに男性では、肉体労働が39.6%で１位、塾・家庭教師（22.2%）と水商売・接客業（14.1%）を大きくこえていた。女性でも、肉体労働は

15.9%で、塾・家庭教師の31.1%には達しないが、水商売・接客業とならんで２位である。男女そろって肉体労働が印象に残っているようである。

図１－５-12ｂは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、1983～1993年のアルバイトの変化である。１位と２位は家庭教師と塾教師で、両者の合計は、63.7%（1983年）、64.0%（1986年）、67.1%（1989年）と増加してきたが、1993年には43.0%と減少した。肉体労働は、9.5%、8.3%、13.1%、9.2%と推移した（同上）。1993年に、家庭教師と塾教師が減少したのに対して、一般事務（13.1%）と飲食店（12.9%）が増加した。

図１－５-12ａ　アルバイト（①長くしている　②印象に残った　単位：%）

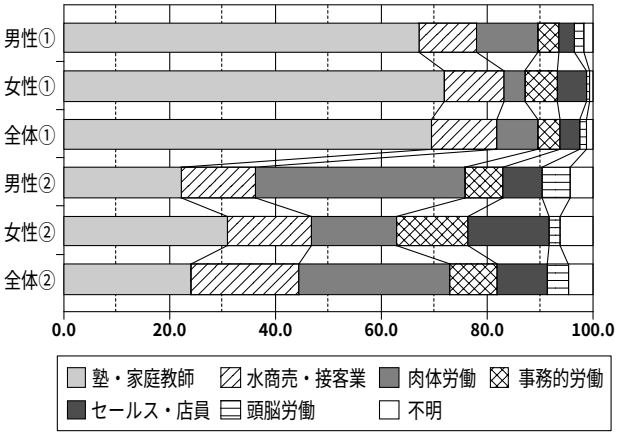
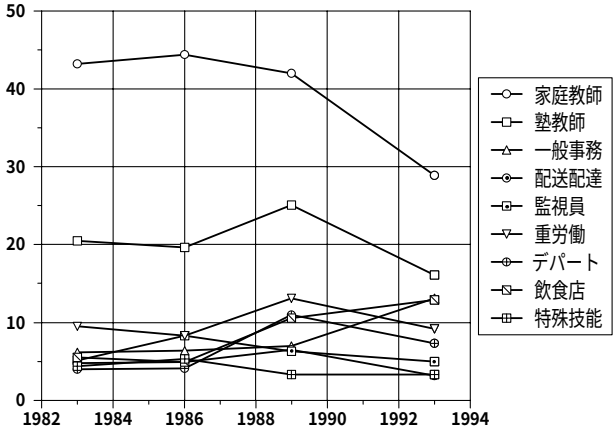


図１－５-12ｂ　アルバイトの変化（単位：%）



第３項　住　　居

⑴　居住形態

図１－５-13ａは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、学生の居住形態である。これでは、自宅生を「親と同居」・「親と別居」・「親と別居しながら食事は一緒」の３つに、寮生を「大学寮」・「公営寮」・「子弟寮」・「勤務先の寮」の４つに、下宿生

を「台所のない下宿」・「台所のある下宿」・「アパート」・「マンション」・「学生会館寮」・「親保有のアパート・マンション」・「食事つき下宿」の７つに分類している。これ以外にも「知人宅」・「その他」がある。このうち、「親と同居」・「大学寮」・「台所のある下宿」（下宿Kあり）・「アパート」・「マンション」の５つについて変化をみる。

図１－５-13a　居住形態（単位：%）

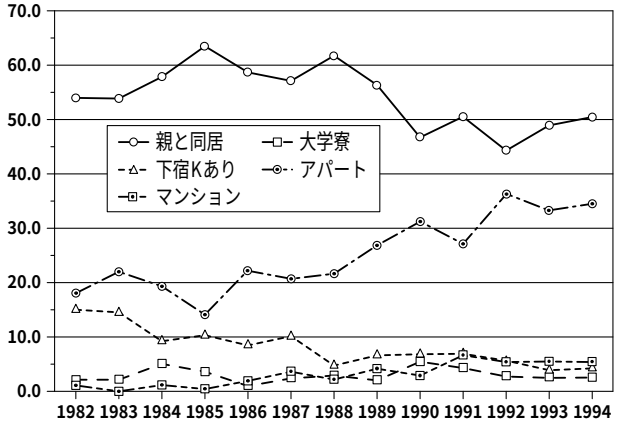
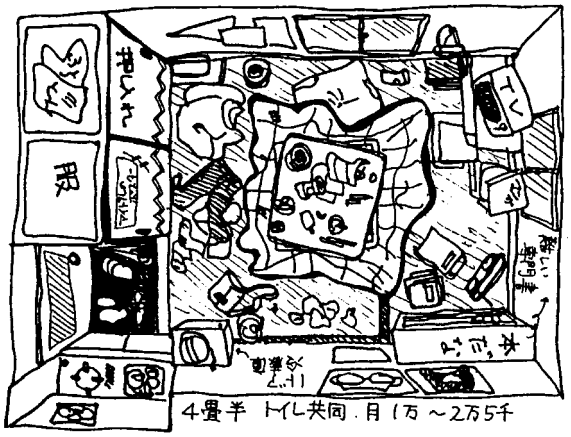


図１－５-13b　４畳半の部屋（1985年の『千葉大生白書』より）80年代前半まではこのような部屋が多かった。ただし広さは６畳の部屋の方が多かった。



ａ．親との同居

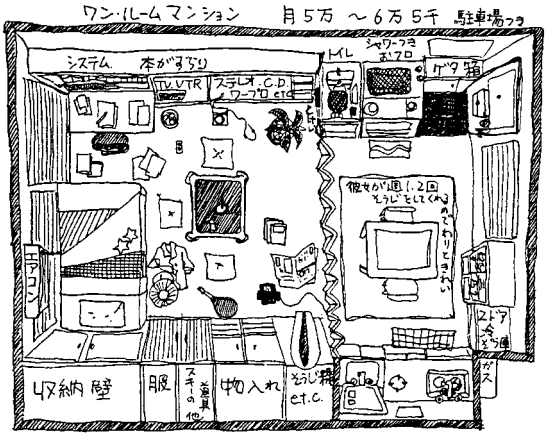
「親と同居」している学生は、1980年代は54～64%の間を推移していたが、1990年代になると、44～51%に減少している。これは、千葉県・東京都出身の学生が減少し、その他の関東・東北・中部などの出身学生が増加したためである。

ｂ．下宿・アパート・マンションなど

これに対して「アパート」に住む学生は、1988年まで14～22%で推移してきたが、1989以降は27～36%で推移するようになった。また「マンション」に住む学生は、1980年代の前半は１%程度だったが、1980年代の後半に２～４%に増え、1990年代になると５%をこえる。ところが「台所つき下宿」に住む学生は、1980年代の初めには

15%ほどいたが、1984～1987年には10%前後、1988年以降は４～７%に減少している。

図１-５-13c　ワンルームマンション（1985年の『千葉大生白書』より）80年代後半からはワンルームマンションに住む学生が増加した。ただし全体からみれば少数派であった。



c．寮

千葉大学における学寮は、現在、西千葉地区（小仲台）に男子寮２（無名寮と稲毛寮）、女子寮１（睦寮）、亥鼻地区に男子寮１（雄翔寮）、松戸地区に男子・女子寮１（浩気寮）の計５寮がある。国立大学の保有する学寮は、戦前あるいは戦時からの旧寮をのぞいて（千葉大学では医学部、人生希望寮と第一学生寮がこれにあたるが、これらは1979年に廃止された）、その建設年次と規格によって、1959年から1975年までに建てられた鉄筋コンクリート製の新寮と1975年以降の建造ないし改築になる新規格寮とに分けられる。稲毛寮、睦寮および浩気寮は新寮で、個室方式をとる。無名寮と雄翔寮は、新規格寮である。1964年文部省通達によれば、管理規則等が整備されており、管理運営が正常に行われること、快適な勉学条件を確保するため居室は個室とし、共用部分を含めた延べ面積は18m^{2}を基準とすること、電気・ガス・水道についてはメーターを設置し、区分を明確にするほか、食堂は原則として設けないことを要件として指示している。

このように学寮は、かつては健全な自治生活を通じて人格を形成する教育の場としてとらえられていたのが、現在では、なによりも学生の経済的援助を主眼とし、低廉で快適な生活の場を提供するための施設と位置づけられている。

本学には、上記の学寮のほかに小仲台男子統合寮に隣接する留学生寮および留学生家族寮がある。留学生寮は、1960年留学生部の設置にともない建造され、以降整備されてきたもので、男子139室、女子30室がある。また1993年には、留学生家族寮（夫婦室24戸、家族室14戸）が留学生寮に隣接して新営された。1994年度以降、留学生関係の宿泊施設は国際交流会館として新営または改修され、着々と整備が進んでいる。将来は日本人学生と外国人学生とが生活の場をともにするいわゆる混住の形態が導入

されることが予想され、そのためにも、日本人寮生が因習を克服する必要があるものと思われる。

「大学寮」に住む学生は、ほぼ一定（１～６％）で推移している。

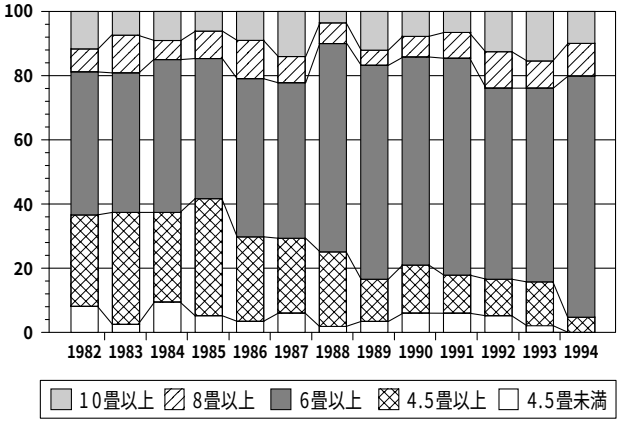
⑵　部屋の広さ

学生の部屋の広さは、学生を自宅生と自宅外生（寮生と下宿生）に分けて考える。

自宅生の部屋は、1980年代では、６畳未満が約30%、６～８畳が約65%、８畳以上が約15%であった。1990年代になると、６畳未満が約25%に減り、６～８畳は約65%と変わらないが、８畳以上が約20%に増えている。自宅生の部屋は広くなっている。

図１－５-14は、『学生生活実態調査』をもとに作成した、自宅外生の部屋の広さである。自宅外生の部屋は、1980年代前半では、６畳未満が約40%、６～８畳が約45%、８畳以上が約15%であった。1980年代後半に、６畳未満が減少し、その分、６～８畳と８畳以上が増加した。そのため1990年代になると、６畳未満が20%以下（1994年は５％近く）まで減少、６～８畳が60%以上（1994年は75%近く）まで増加、８畳以上が約20%であった。自宅外生の部屋は、自宅生の部屋以上に、広くなっている。

図１－５-14　自宅外生の部屋の広さ（単位：％）



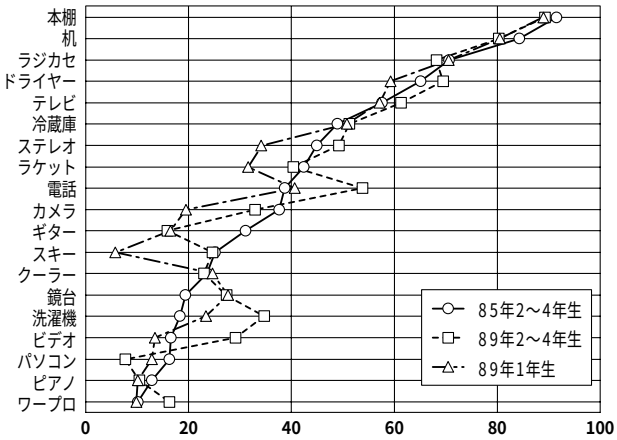
「収入と支出」で住居費の増加について述べたが、この原因は、単に家賃が高騰しているだけではなく、より広い部屋を借りることで住居費が増加していると推察できる。

第４項　持 ち モ ノ

⑴　部屋にあるモノ

図１－５-15は、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、部屋にあるモノである。２～４年生同士を比べると、それほど大きな変化はないようである。1985年と比べて、1989年に増えたモノは電話・洗濯機・ビデオ・ワープロで、逆に減少したモノはギターとパソコンである。洗濯機の普及は下宿が減少してアパートが増えたことと関係あるのかもしれない。ビデオは、全国の普及率が28.0%から65.1%にあがっているので、それにともなって増えているのであろう。ギターが減少したのは、ギターを弾くといった1960年代後半～1970年代前半に成立した若者文化が、1980年代後半のバブル経済のなかで、変容したからなのではないのか。パソコンが減少しているが、これは学生が持つパソコンが８ビットから16ビットに変化したからであろう。1985年では、16ビット・パソコンの価格が約30万円以上と高価なので、学生が個人で持つことができたのはおそらく８ビット・パソコンだった（価格が10万円以下のものもあった）と考えられる。これが1989年になると、ほとんどが16ビットになり、32ビットも登場したが、価格は20万円以上したので、逆に持っている者が減ったのであろう。また1989年では２～４年生よりも１年生の方がモノを持っていない。とくにスキーは、シーズン前（10～11月）の調査だったので、１年生の持つ比率が極端に少なかった。

図１－５-15　部屋にあるモノ（単位：%）

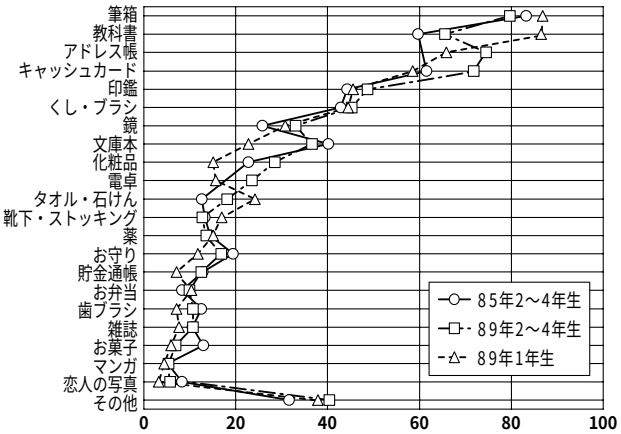


⑵　カバンの中身

図１－５-16は、1985年と1989年の『千葉大生白書』で調査した、学生のカバンの中身である。1985年と比べて1989年ではアドレス帳と電卓が新たに増えているが、部屋にあるモノと同じく、あまり大きな変化はない。ただ1989年の１年生が、1985年と

1989年の２～４年生に比べて、教科書を持っている者が多いところが特徴的であった。1990年代後半の調査はないのだが、おそらく現在（1999年）では、携帯用の音楽メディア（カセット・テープ、CD、MD）再生装置と携帯電話やPHSを持っている学生が多いのではないだろうか。

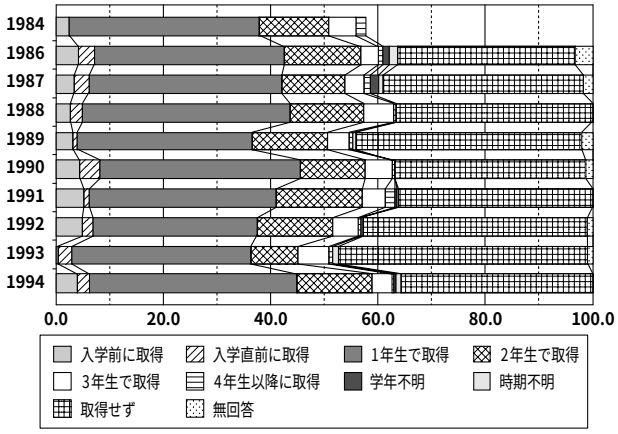
図１－５－16　カバンの中身（単位：％）



⑶　自動車免許

図１－５－17は、『学生生活実態調査』をもとに作成した1984・1986～1994年の四輪免許の取得時期である。これによると、52.5％（1993年）から64.0％（1994年）の学生が免許証を取得していた。学年でいうと、１年生が30.6％（1992年）～38.8％（1988年）ともっとも多く、ついで２年生が8.8％（1993年）～16.1％（1991年）とつづく。３～４年生での取得は少ない。しかし実際に車を持っている学生となると、1985年の『千葉大生白書』だと、27.9％であった（医学部は56.1％、1985年の自動車普及率は65.3％）。

図１－５－17　四輪免許証の取得時期（単位：％）



第５項　学生と読書

⑴　読書時間と書籍購入金額

「最近の若者は本を読まなくなった」といわれてから久しいが、学生の読書時間と書籍購入金額はどのように変化しているのであろうか。

図１－５-18ａは、『学生生活実態調査』で作成した、１日の読書時間（中央値）である。これによると、1980年代初めには45分以上あった（このころすでに学生は本を読まないといわれていた）が、1980年代をとおして減少しつづけ、1990年には30分を割ってしまった。1990年代になると、下げ止まったのか、30分あたりを推移している。実際に千葉大生は本を読まなくなったのである。

図１－５-18ａ　１日の読書時間（中央値　単位：分）

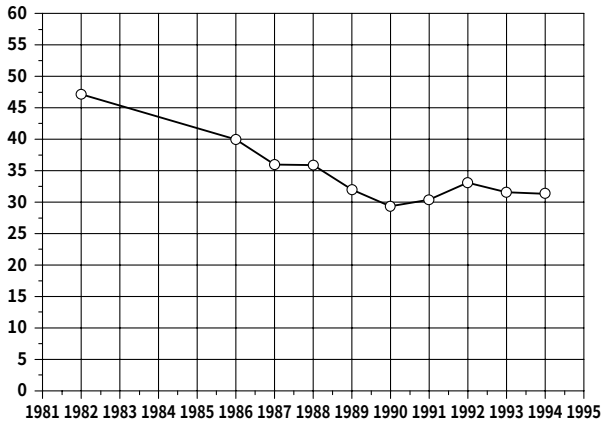


図１－５-18ｂ　書籍と雑誌の購入金額（中央値　単位：円）

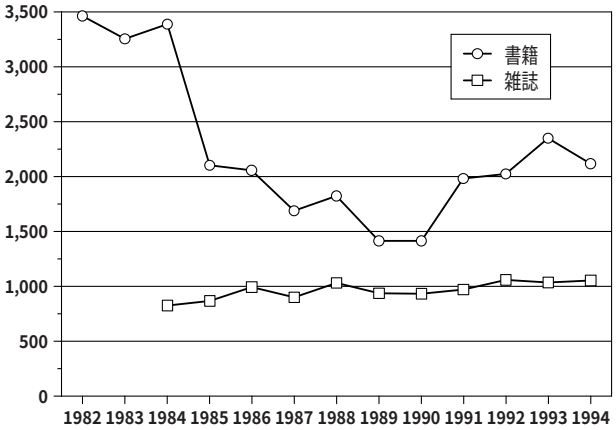


図１－５-18ｂは、同じ資料による１カ月の書籍と雑誌の購入金額（中央値）である。これによると、1980年代のはじめは3,000円をこえる金を書籍の購入にあてていたが、1985年に激減して約2,000円になり、1987～1988年は2,000円を切り、1989～1990年には1,500円を割ってしまった。1990年代にはいると回復し、2,000円台を推移している。千葉大生は本を買わなくなったのである。

1980年代に学生となった人たちは、生まれたときから、マンガを読み、テレビを見

ており、情報を得るメディアが活字メディアに限られていない。また1980年代は、「ウォークマン」や「ディスクマン」のような携帯用の音楽メディア再生装置と、家庭用ゲーム機器が普及した時代であった。このため、学生が本を読まなくなったのは、当然なのかもしれない。

⑵　マンガと雑誌

図１－５－18ｂには、１カ月の雑誌の購入金額（中央値）も示されている。これによると、雑誌購入金額は、1982年の824円から1994年の1,056円に漸増している。

表１－５－１は、1985年の『千葉大生白書』で調査した、よく読む雑誌である。よく読む週刊誌は、１位がマンガ（37.1％）、２位が情報誌（20.5％）、写真雑誌（16.1％）、趣味・娯楽（15.9％）と続く。男性ではマンガ（50.4％）、情報誌（17.8％）の順であるが、女性では情報誌（41.4％）、マンガ（21.8％）の順であり、順位が逆にな

写真１－５－２　千葉大生協メディア館

表１－５－１　よく読む雑誌（単位：％）

	週刊誌			月刊誌		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
マンガ	50.4	21.8	37.1	7.6	24.7	12.8
情報誌	17.8	41.4	20.5	18.9	33.3	32.2
写真雑誌	9.9	10.3	16.1	—	—	—
趣味・娯楽	12.8	12.6	15.9	47.5	23.5	32.0
いわゆる週刊誌	5.8	6.9	6.8	—	—	—
専門誌	—	—	—	13.4	10.5	12.1
教養関係	—	—	—	5.9	3.7	4.2
文芸・経済・政治	—	—	—	2.9	1.2	3.8
その他	3.3	6.9	3.7	3.8	3.1	2.9

っている。

月刊誌では、情報誌(32.2%)と趣味・娯楽（32.0%）が双璧をなし、マンガ（12.8%)、専門誌（12.1%）と続く。ここでも、男性では趣味・娯楽(47.5%)、情報誌（18.9%)、専門誌（13.4%）の順であるのに対して、女性では情報誌（33.3%)、マンガ（24.7%)、趣味・娯楽（23.5%）の順であり、順位がちがっている。

大学生がマンガを読むようになったのは、1960年代の後半からであり、千葉大生も例外ではない。男性の読むマンガが圧倒的に週刊誌であるのは、1959年の『少年サンデー』の創刊以来、週刊誌が圧倒的に読まれてきたからである。少年マンガでは、1980～1985年には『少年サンデー』、1985～1995年には『少年ジャンプ』、1995年以降は『少年マガジン』がよく読まれている。一方、女性の読むマンガは月刊誌の方がやや週刊誌より多い。少女マンガでは月刊誌と週刊誌がほぼ同じくらい読まれているからである。また1980年代には『ヤングジャンプ』や『ビッグコミックスピリッツ』のような青年マンガが登場した時期でもあった。

情報誌が千葉大生によって読まれているが、これも1980年代の１つの特徴である。映画・音楽・演劇・都市情報といった情報誌の分野では、1980年代には『ぴあ』、1990年代には『東京ウォーカー』をあげることができる。『ぴあ』が情報を網羅的に提供するのに対して、『東京ウォーカー』はオシャレな東京生活という基準で情報を絞り込んでいる。現在は情報化社会とよばれているが、飛躍的に情報量が増加した1980年代には、情報を網羅的に提供するカタログ的な『ぴあ』が好まれ、情報量の増大によって選択が難しくなった1990年代には、それを絞り込んだマニュアル的な『東京ウォーカー』が好まれるようになった。このような情報誌の千葉大生への影響は大学祭のパンフレットに現われており、1980年代半ばからは『ぴあ』の欄外の読者投稿欄「はみだしYOUとPIA」をまねた欄外への書きこみ（「はみだし大学の音」、「はみだし性格判断」など）が登場し、1990年代半ばからは大学祭マスコットによる催しものの紹介というマニュアル化がみられる。現代の若者のカタログ文化・マニュアル文化は千葉大生に大きな影響を与えている。

また写真雑誌（写真週刊誌）であるが、1980年代前半に『フォーカス』と『フライデー』が創刊され、それぞれ百数十万部も売れていた。1980年代後半には『エンマ』・『タッチ』・『フラッシュ』が創刊されたが、このころになると写真雑誌の人気は急速に落ち込み、後発の３誌は『フラッシュ』を除いていずれも休刊となった。

第６項　レクリエーション

⑴　テ　レ　ビ

表１－５－２は、1985年の『千葉大生白書』で調査した、千葉大生がよくみるテレビ番組である。これによると、千葉大生がよくみるのは、「お笑い番組」（26.7%）、「ニュース」（22.9%）、「ドラマ」（15.1%）の順であった。当時は、1980年のMANZAIブーム以来、「おれたちひょうきん族」（フジテレビ、1981年）や「笑っていいとも！」（同、1982年）など、いわゆる「お笑い番組」の全盛期であり、その影響を千葉大生も受けていたようである（1982年の大学祭のテーマは「俺たち房総族」であり、その影響は明らかである）。またニュースが２位になっているのは、この年に「ニュースステーション」（テレビ朝日）の放送がはじまり、「報道番組ブーム」の起きた年でもあったからである。ドラマが３位なのは、翌1986年に「男女７人夏物語」（TBS）が放映され、いわゆる「トレンディドラマ」のブームが起きる前だからであろう。その後、この種の調査はないが、千葉大生のみるテレビ番組も大きく変化しているであろう。

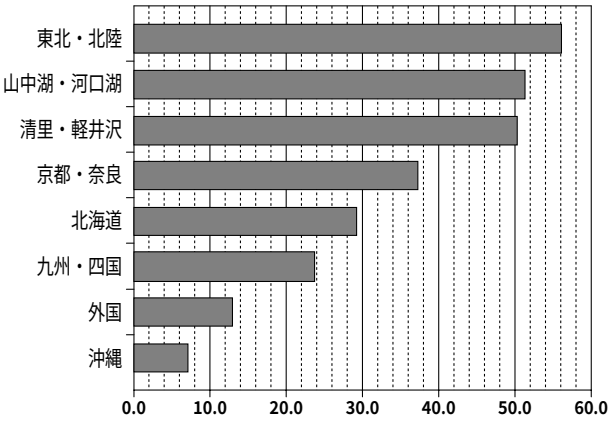
表１－５－２　よくみるテレビ番組（単位：%）

お笑い番組	26.7	ニュース	22.9	ドラマ	15.1
マンガ・アニメ	8.6	スポーツ番組	7.9	歌番組	5.2
クイズ番組	4.0	ドキュメント	1.4	その他	8.2

⑵　旅行の経験

図１－５－19ａは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、入学以来の旅行の体験である。これによると、旅行先の１位は東北・北陸（56.0%）で、ついで山中湖・河口湖（51.1%）、清里・軽井沢（50.1%）とづづく。近場が多く、遠い北海道

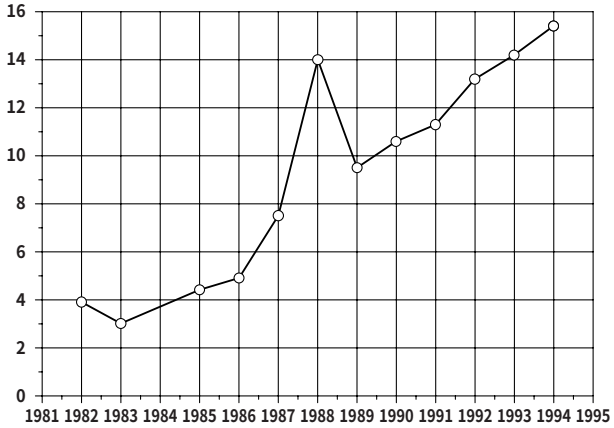
図１－５－19ａ　旅行の経験（入学以来　単位：%）



（29.1%）、九州・四国（23.6%）、沖縄（7.0%）は少ない。外国が12.7%あった。

図１－５-19ｂは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、１年間の海外旅行の経験者数の推移である。これによると、1980年代の前半は、3.0%（1983年）～4.9%（1985年）と、経験者は少なかった。しかし1980年代後半に増加し、1988年には14.0%が経験していた。その後、1989年に9.5%まで減少するが、その後は増加をつづけ、1994年には15.4%が海外旅行の経験を持った。海外旅行の経験は、自宅外生よりも自宅生、理系よりも文系、男性よりも女性の方が多い。

図１－５-19ｂ　海外旅行の経験者（１年間　単位：%）

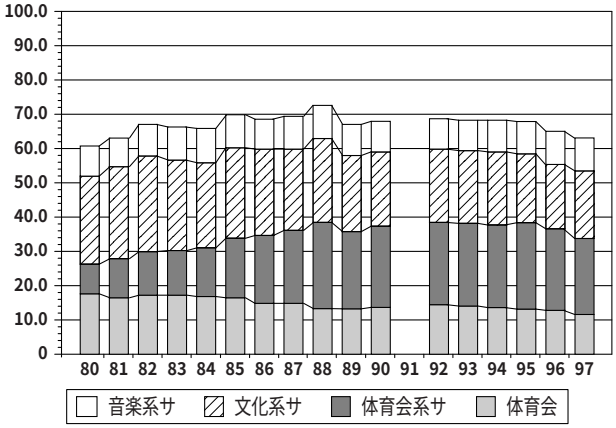


第７項　課外活動

図１－５-20ａは、『学生生活のために』をもとに作成した、1980～1997年（1991年は欠落）の体育会とサークルに属する人数の全学部学生に対する割合で、体育会・体育会系サークル・文化系サークル・音楽系サークルに分類してある。体育会と全サークルの合計は、59.8%（1980年）から71.4%（1988年）の間で推移し、全学部学生の10人に６～７人が体育会やサークルに属している（もちろん複数の体育会・サークルに属する学生もいるが）。体育会に属す

図１－５-20ａ　体育会・サークルの人数

（単位：%　人数/学部学生数）



る学生は17.3%（1980年）から11.3%（1997年）に漸減した。文化系サークルに属する学生は、25.5%（1980年）から27.5%（1982年）に増加し、その後は18.7%（1996年）に漸減した。これに対して体育会系サークルは、1980年代に8.4%（1980年）から24.8%（1988年）に急増し、1990年代は21.9%（1997年）から25.0%（1995年）の間で推移した。音楽系サークルは、8.1%（1981年）から9.8%（1984年）の間を推移した。

図１－５-20ｂ　よくするスポーツ（単位：%）

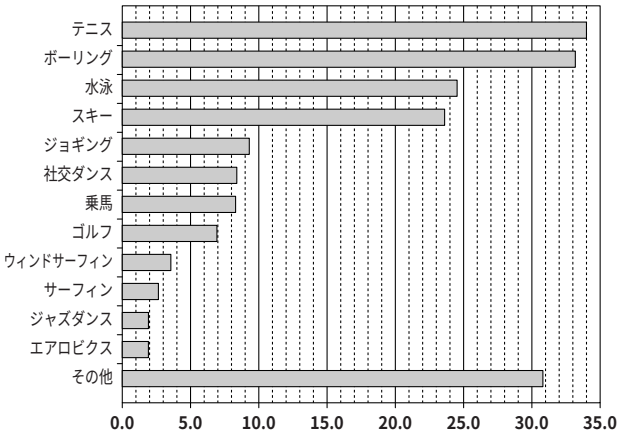


図１－５-20ｃ　硬式庭球部と４サークルの変化（単位：人）

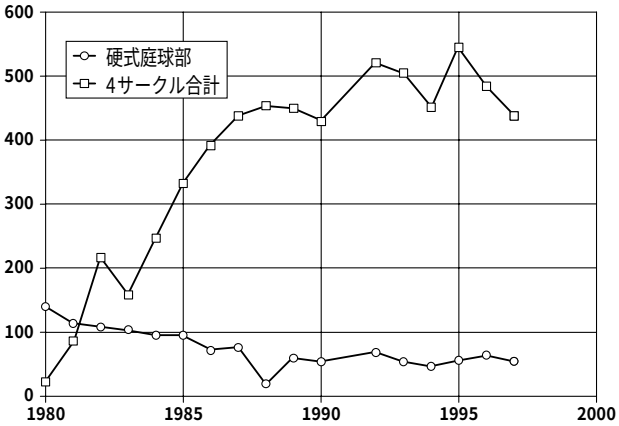


図１－５-20ｂは、1985年の『千葉大生白書』で調査した、千葉大生がよくするスポーツである。これによると、１位はテニス（34.0%）、ついでボーリング（33.3%）、水泳（24.5%）、スキー（23.7%）であった。図１－５-20ｃは、硬式庭球部とテニスの４サークルの合計人数の推移である。1980年代をとおして、体育会である硬式庭球部の人数は漸減しているのに対して、体育会系サークルの人数は激増した。このあたりにも千葉大生のテニス人気が現れている。